## 第２　教育研究団体の意見・評価

### ○　日本国語教育学会

（代表者　桑原　隆　　会員数　約2,900人）
ＴＥＬ　03-6801-5951

### １　前　　文

⑴　現代文分野

第一問は、本試に比べると抽象度も高く国語総合のレベルより高い。用語の説明を含むリード文は珍しく、このリード文がわからないと読めない文章だった。レコードやCDにまで注がつくことに驚いた。第二問については、時代が古く、注もかなり多い。陶磁器のイメージが生徒につくのか疑問。生徒の文化資本によって左右される内容なため、広い層が受ける試験としては妥当ではないのではないか。都市部と地方の文化格差が鼻につくようなところもあり、地方の学生が受ける試験としても相応しくないように感じる。

⑵　古典分野

本試験と比べて分量は妥当。問題文の難易度の差はそれほどない。古文は追試の方が少し易しく感じられた。

### ２　試験問題の程度・設問数・配点・形式

第１問　言語論を学習している者にとっては妥当な内容だが、読んでいて文章後半の内容がなかなか頭に入ってこなかった。こねくり回された文章という印象。問題としてもともと用意されていたものに、問６だけを後から追加したような印象。

問１　⑺「依嘱」は受験生にとって身近な漢字ではない。音読みだけの漢字で、バリエーションがなく、３題だけ。なぜ５題ないのか。本試験の形式とかなり隔たりがある。

問２　いきなり難しい問題。「内的なものとの間に差異」という言葉に引っかかった。誤答にまぎれはないが、消去法で解く生徒も多かったのではないか。傍線部のあとの「例えば」以降をよく読まなければ解けない、丁寧な読みが要求される。

問３　「声」と「文字」と「言葉」の関係をつかめていたかどうかで解けるかどうかが決まる。論理構造をメモしながら解いていった。ここを問うのは妥当。傍線部の主語を「私」として捉えた生徒は、選択肢の解答とのずれに悩んだのではないか。近代論をきちんと学んでいる生徒からすると、前近代には個人という概念自体が明確にあったわけではないので、正答の「個人」という表現は引っかかるのではないか。

問４　問うべきところ。傍線部「身体の方を自らに帰属させる」が読めているかどうかが問われている。誤答も妥当。電気的メディアの説明が長いので、そこがきちんと読めていれば解ける。ただ言い換えの問題が連続しており、やや変化に欠ける。この文章だと難しいか。

問５　構成・展開を問う大事な問題。概括する視点を持たせるための問い。問４と若干重なる。正答の「具体例を挙げて考察し」が、当たり障りがなく、やや踏み込みが浅い。誤答③にリード文の言葉をそのまま使っており、しかも誤答にしているということで、これは受験生に対して少し厳しい。

問６　高校生の「あるある作文」に近く、高校生の実態をよく反映している。ただ解くのに時間がかかる。初見で文章を読むと、Ｎさんの考えがわからない。⒳を読んで初めて接続詞が

不適切であることがわかり、後になってやっと「原文では読めなかった」ということがわかった。(ⅲ)「神の言葉を語る」という本文を踏まえての正答が③なのだろうが、この正答は【文章】単体での結論にはならないのではないかという意見が出た。逆に、本文を全く考えず【文章】単体を読んだ時に、声に身体を重ねる＝声の中に身体を見出してしまうと考えれば、それゆえ他者を特定できないという論理になり、そう考えれば③が選べるのではないかという意見も出た。いずれにせよＮさんの発想が本文からかなり飛んでおり自己内世界に浸っているため読みにくく解きにくい。また接続詞を修正させる問題を出した意図は、「表現の推敲過程」を生徒に学ばせるということなのか。本文を読ませたいのか、文章単体での推敲をさせたいのか、出題者の意図が見えないところがあり、本文と全く切り離して解く文章問題を出すことにどの程度意味があるのか疑問。こうした問題に沿うような授業を一斉授業の形で行うことは果たして可能なのかわからない。生徒同士の推敲し合いを促すような授業が求められているのだろうか。

第２問　第１問と組み合わせると、受験生の負担が非常に重い。問題文の見栄えとして、行間がもう少し調整できなかったのか。ユニバーサルなデザインとしてはやや粗雑なところがあるか。

問１　問うべき箇所。問５とペアになるような問題。正答「うら悲しい」は日常使わないような言い回しなので、他の表現にできなかっただろうか。

問２　「興奮」「卑俗」「冷静沈着」など、まず「彼」の心情を確認するところから解く問題になってしまっていた。表現そのものを問う問題としてはやや勿体ない。

問３　「彼」について問うことは必要。選択肢も妥当。(ⅰ)の②は「人物」というところだけが誤答だと思われるが、紛らわしい。内容と心情を２つに分けて問うほど重要な問題だったのかどうか疑問。(ⅰ)と(ⅱ)はセットで解ける問題になっているので、このような問いにするよりも、心情の「理由」を問うなど、他に問うべきところがあったのではないか。

問４　良問。問うべき箇所。選択肢もわかりやすい。②がやや紛らわしい。

問５　問うべき箇所。主人公の感情がクライマックスを迎える局面での問い。

問６　比べ読みの問題。受験として考えれば、問５までの問いがきちんとできているかの確かめ問題になっている。資料も本文もどちらも読ませ甲斐があるので、比重の置き方が難しい。また、蒐集家が陥りがちな「俗っぽさ」に「陥らなかった」ところに喜ぶ主人公を描く小説なので、【話し合いの様子】が、そこの小説の核心部分をうまく反映できていない。このような形式の問題は、文学研究の手法につながるため良い傾向と言えるだろうが、小説の核心部分を失うことなく、より小説の核心部分についての読みが「深まる」ような問いが設定できるとなお良い。

第３問　国語総合として考えると難しかった。問４では、また比べ読みがあったが、本試験よりも比べることありきという感じがした。それによって難易度が上がるとすると、それはやめてもらいたい点である。本文自体は、語法的な広がりのない箇所で、問題作成のバリエーションの多様さにつながらなかった。

問１　必要な設問と思われるが、単純すぎる。漢文の方向性に古文を寄せており、古い方への回帰を感じた。

問２　問２、問３、問４(ⅱ)は、接続助詞の感情の揺らぎを捉えるものになっており、使う言語能力は同じもののため、場面は違うが差がない。昨年に比べるとバリエーションがない。

問３　「かえって」という語がこの問題と、また問２でも正答に入っている。選択肢に使う用語ももう一工夫してほしい。

問４(ⅰ)は、従来だと注に入っていたようなものを問題として取り出して読ませる取り組みであ

り、問題の工夫としてはあって良いのでは。このように方向性としては評価できるが、選択肢の質は再考の余地はあるのではないか。

(ii)この文章のこの問いに関しては妥当であるが、引き歌の問題を毎回このような形で出すようなことはあまり意味がないと思われるので検討してほしい。正答を導き出すには、消去法で解くしかない。

問５　使役の取り方を問う、やさしめの文法ベースの問題。全体のまとめのような設問がなく、問題の構成としては疑問が残る。

第４問　文章の難易度は適切なレベル。

問１　基本的な知識問題として妥当。

問２　選択肢を使って基本知識を広く確認する問題として工夫されている。

問３　基本的な漢文の句形知識を問う問題で妥当。

問４　棒線部自体の白文の難易度は本試験と比べてやさしめなので、許容範囲。問２、３、４は句形を問うものに偏っており、工夫が必要。

問５(i)特段大きな問題はないが、正答選択肢中の「人」の中身がややわかりにくい。

(ii)正答に紛れはないが、正答選択肢の比喩と比喩されるものの内容が直接的には書かれておらず、読み取りにくい。

問６　全体のまとめとして、正答に紛れもなく妥当。